

道

織田作之助

青空文庫

今もそのアパートはあるだろうか、濡雑巾のようにごちやごちやした場末の一角に、それはまるで古綿を千切って捨てたも同然の薄汚れた姿を無気力に曝していた。そのあたりは埋立地のせいか年中じめじめした湿気が去らなかつた。日の射さぬ中庭は乾いたためしはなかつた。鼠の死骸はいつまでもジクジクしていた。近くの古池からはなにかいやな沼気が立ちのぼるかと思われた。一町先が晴れてもそこだけは降り、風は黒く渡り、板塀は崩れ、青いペンキが剥げちよろけになつたその建物のなかで、人びとは古障子のようにひっそりと暮らしていた。そして佐伯はいわばその古障子の破れ穴とでもいふべきうらぶれた日日を送っていたので

ある。

佐伯が死んだという噂が東京の本郷あたりで一冉ならず立ち、それが大阪にいる私の耳にまで伝わってきたのは、その頃のことだ。本当に死んでしまったのかとそのアパートを訪れてみると、佐伯はまだ生きていて、うっかり私が洩らしたその噂をべつだん悲しみもせず、さもありませんという表情で受けとり、なにそのおれが死んだというデマは実はおれが飛ばしてやったんだと陰気な唇でボソボソ呟き、ケツケツというあやしい笑い声を薄弱な咳の間から垂らしていた。げっそりと肉が落ち、眼ばかり熱っぽく光らせた蒼白いその顔を見て、私は佐伯の病気もいよいよいけなくなったのか、なるほどそんな噂が立つのも無理はあるまいという

想いにいきなり胸をつかれたが、同時に佐伯の生活にはもはや耳かきですくうほどの希望も感動も残っていない。今は全く青春に背中を向け、おまけにその背中を悔恨と焦躁の火でちよろちよろ焼かれているのではないかと思われて、慰める言葉も私にはなかった。

ところが、その佐伯がすっかり変ってしまったのだ。亀のようにむつつりとしていた男が見ちがえるほど陽気になって、さかんにむだな冗談口を叩く。少しお饒しやべり舌を慎んだ方が軽薄に見えずに済むだろうと思われるくらいである。のべつ幕なしにしやべっている。若い身空で最近なほは講演もするということだ。あれほどの病気もすっかり癒なほってしまったとは思えないが、見たところピチ

ピチして軽く弾んでいる。角がとれ、愛想の良くなつたことは驚くばかりだ。血色のよい頬にその必要もなさそうな微笑を絶えず泛^{うか}べている。以前は縦のものを横にすることすら億劫がつていた。枕元にあるものを手を伸ばして取ろうとしなかつた。それが近頃はおかしいくらい勤勉になつて、ひとの二倍も三倍も仕事をしてけろりとしている。もとは售^うれぬ戯曲を二つか三つ書いていたよ^うだつたが、今は戯曲のほか^にに演出にも手を出す。舞台装置もする。映画の仕事もする。評論も書く。翻訳も試みる。その片手間に随分多量の小説も発表するが、べつだん通俗にも陥らず、仕事のキメも存外荒くはない。まずはあつと息をのむような鮮かな仕事振りである。聴けば、健康診断のたびに医者^は当分の静養をす

すめるそうだが、そんなことはけろりと忘れた顔をして、忙しく派手に立ち働いている。隣組の組長もしているという。三十歳そこそこの若さでだ、阿修羅みたいにそんなに仕事ができるのはよくない前兆だぞと、今はもう冗談にからかってもギクリともしない。不死身の覚悟が出来ているかのようである。死んだという噂を立てられてから六年になるが、六年の歳月が一人の間をこんなに変えてしまうのかと、まるで嘘みたいである。いやその六年の間生きのびて来たということだけでも、殆ど奇蹟である。当の佐伯にしても、こんな筈ではなかったのだが、おかしいねと、うれしそうな首をひねっている。

もっともこういうことは言っていた。胸の病いなんでものは、

ひどく月並みな言い方だが、よほど芯の弱い者でない限り気持ちもち方ひとつ、つまり精神で癒せるものだ、また人間の性格なんてもものそう急にがらりと変つてしまうものではない。陽気な性格の者ははじめからそういう素質を持っているものだ、ただ自分などあの頃は陰鬱な殻を被つていたのでその素質がかくされていたのに過ぎない、つまりはその殻を脱ぎ捨てる切っ掛けを掴んだというだけの話、けれどその切っ掛けを掴むということが一見容易そうでその実なかなかむつかしくて、その動作の弾みをつけるのは並大抵のことではなかったと言うのである。例えば、彼はそのアパートを移ると言う簡単なことの弾みが容易につかなかつたらしい。そしてそれが何よりいけなかつたのだ。そのアパートの

不健康さについては前に述べたが、殊に彼の部屋ときてはお話にならぬくらいひどかった。

実際私は訪れるたびに呆れていた、いや訪れることすら避けたかったくらい、それはどんな健康な人間でもそこに住めば病気になつてしまうだろうと思われた、それほど陰気な部屋であつた。

佐伯はそのなかに蝸牛のように住みついていたのである。その部屋はアパートの裏口からはいったかかりにあつて、食堂の炊事場と隣り合つていた。床下はどうやらその炊事場の地下室になつてゐるらしく、漬物槽が置かれ、変な臭いが騰つてきてたまらぬと佐伯は言つていた。食堂の主人がことごとその漬物槽の石を動かしている音が、毎朝枕元へ響いて来る。漆喰へ水を流す音もする。

そのたびに湿気が部屋へ浸潤して来るように思われたと言う。それがなくても、いったいが湿気の多いじめじめした部屋であつた。日の射さないせいもある。年中敷きっぱなした蒲団をめくると、青い黴がべつたりと畳にへばりついていた。銀色の背中をした名も知れぬ虫がさかんに飛びまわる。蜘蛛の巣は勿論である。掃除をしたことがないのだ。アパートの女中が見兼ねて掃除をしてやろうと言つても、なにか狼狽して断つてしまふらしい。私はいつ訪ねてもきつと足袋の裏と鼻の穴を黒くして歸つた。猫の額のような中庭に面して小窓がひとつきりあるのだが、窓といつても窓硝子を全部とつてしまったところであつたことでもないちつぽけなものだし、それに部屋のなかを覗かれることを極度におそれて

いる佐伯は夏でもそれをあけようとせず、ほんの気休めに二三寸あけてそこへカーテンを引いて置き、その隙間から洩れる空気を金魚のように呼吸するだけという風通しの悪さを我慢していたのだ。勿論部屋は狭かった。佐伯は四畳半あると言っていたが、私は数えてみて三畳半しかないのにびっくりした。

さすがの佐伯もそんな部屋にはますます病気を悪くするばかりだとチリチリ焦躁を感じていたらしかったが、ほかのアップトや部屋へ移ろうとしない。その気になれないのだ。ほんのちよつとした弾みがつかないのである。得体の知れぬ部屋の悪臭をかぎながら、つまりこれがおれの生活の異臭なんだと、しかしちよつと惹きつけられてみたり、そうかと思うと、それを毎夜なんの

あてもなしにそわそわと街へ出掛けて行く口実にしていた。ひとつには彼が街をほつつき歩くのは孤独をまぎらすためである。彼のような寂しがり屋を私は見たことがない。自分が死んだという噂を聴いてもそんなに悲しまなかつたのも、たとえ碌でもない噂にせよひとが自分の噂をしているということが嬉しいのである。

全く忘れられてしまうのが辛いのだ。その頃彼はこんな夢を見たといつて私に語つた。——病氣もいよいよいけなくなり死んでしまった。どこかの家の二階の階段を上つた狭く美しい場所で長くなって死んでいた。だらんと伸びた足が黒足袋をはいて階段に掛つている。お通夜に集つて来た友人が変なところで伸びやがつて、登り降りの邪魔だよ、だからノツポは困るんだなどと言つている。

がやがやと騒がしいお通夜になって来た。ボートのバック台の練習をしながらワレハ海ノ子と歌いだす者がある。議論がはじまる。ラスコリニコフが階段の途中でペンキ屋にどうかされたとか何とかシロサキが言っている。よせやい、お通夜じゃないか、静にしろとアオヤマが言うとおダが、いやこいつは派手なお通夜の方が喜ぶぜと言って、おいサエキそうだろうと声を掛ける。すると自分はそうだそうだ、おれは派手な方がいいんだ、陽気にやってくれと言って、ここで死んでちや邪魔なんだろうとむっくり起き上って一緒に騒ぎだし、到頭自分のためのお通夜の仲間にはいつてしまったという夢である。それほど寂しがり屋なのだ。

しかし街は佐伯の孤独をすこしも慰めてくれなかった。彼が街

を歩くと、街は灰色になった。佐伯が掛けると、誰もその卓子を敬遠した。陰鬱な眼をぎよろつかせ、落ち込んだ鈍い光を投げながら、あたり構わずいやな咳をまき散らすからだ。時には手帛を赤く染め、またはげしい息切れが来て真青な顔で暗い街角にしゃがんだまま身動きもしない。なにか動物的な感覚になって汚いゴミ箱によりかかっていたりしている。当然街は彼を歓迎せず、豚も彼を見ては嘔吐を催したであろう。佐伯自身も街にいる自分がいやになる。そのくせ彼は舗道の両側の店の戸が閉まり、ゴミ箱が出され、バタ屋が懐中電燈を持って歩きまわる時刻までずるずると街にいて彷徨をつづけ、そしてぐったりと疲れて乗り込むのは、印で押したようにいつも終電車である。

佐伯が帰って来る頃には、改札口のほの暗い電燈をぽつんと一つ残して、あたりはすっかり明りを消してしまっている。駅員室のせまい暗がりのなかでふと黒く蠢いたのは、たぶん宿直の駅員が終電車の著ついた音で眼をさましたのであろう。しかし起きて来る気配もない。すくない乗客はたいてい一つ手前の駅で降りてしまうので、その寂しい小駅に降り立つ人影は登音もせぬくらいまばらである。たった一人の時さえ稀めずらしくなく、わざわざ改札に起きだして来るのも億劫なのであろう。したがって渡し損ねた切符が随分袂のなかに溜っている。それを佐伯は哀しいものに思い、そんな風に毎夜おそく帰って来る自分がまるで夜店出しの空の弁当箱に残っている梅干の食滓のように感じられて、情ないのだ。

なぜもつと早く、いつそ明るいうちに帰つて来ないのかと、骨がくずれるような後悔に足をさらわれてしまう。毛穴から火が吹きだすほどの熱、ぬらぬらしたりパード質に包まれた結核菌がアルコール漬の三月仔のような不気味な恰好で肝臓のなかに蠢いているだろう音、そういうものを感じただけではない。これから歩かねばならないアパートまで十町の夜更けの道のいやな暗さを想うと、足が進まないのである。カランカランという踏切の音を背中に聴きながら、寝しずまった住宅地を通り抜けると、もはや門燈のにぶい光もなく道はいきなりずり落ちたような暗さでそこに池がある。蛙が真つ暗な鳴声を立てている。池の左手には黒ぐろとした校舎がやもりのような背中を見せて立っている。柵がある。

その柵と池の間の小径を行くのだが、二人並んで歩けぬくらい狭く、生い茂った雑草が夜露に濡れ、泥ぬかるみ濘もあるので、草履はすぐべとべとになり、うっかり踏み外すと池の中へすべり落ちてしまふ。暗い。摺り足で進まねばならなかつた。いきなり足を蹴るものがある。見えないが、ひき蛙らしい。蛇もいそうだ。佐伯は張子のように首をだらんと突きだしたじじむさい恰好で視線を泳がせる。もし眼玉というものが手でひっぱり出せるものなら、バセドウ氏病の女のそれのように、いやもつと瞳孔から飛び出させて、懐中電燈のように地面の上を這わせたいくらいである。佐伯は心の中で半分走っている。が、走れない。ふと見上げると、ひっそりした校舎の三階の窓にぼつりと一つ灯がついている。さつ

き見た時にはその灯はついていなかった筈だがとそつと水を浴びた想いに青く濡れた途端、その灯のついた深夜の教室に誰かが蠢いているように思った。いきなり窓がひらいてその灯がぬつと顔を出す。あつと声をのんだ。灯と思つたのは真赤な舌なのだ。いや火だ。口から吐き出す火だ。ぐんぐん伸びて来る。首が舌が火が……。背なかを舐めに来る。ろくろ首だ。佐伯は思わずヒーヒーと乾いた泣き声を出し、やつとその池の傍の小径を通り抜ける。と、原っぱのなかを駈けだす。急に立ち停る。ひどい息切れが来たのだ。胸の臓器を押しつぶしてしまいそうな呼吸困難である。駅の前が真っ白になる。赤い咳が来る。佐伯は青ざめた顔であわただしく咳の音を聴きながらじつと佇んでいる。寂しい一刻だ。

暫らくするとまた歩き出す。恢復した視力でやっとアパートの灯が見える。裏口の裸電燈だ。その灯の下に誰かが佇んでいそうに思われる。いきなりその灯がずっと遠ざかって行く。かと思うと、また引き戻して来る。だんだん近づいて来る。四尺にも足りないちいさな老婆がその灯を持ってとぼとぼやって来るようだ。カラコロと下駄の音が聴える。出会いがしらにふつと顔を覗かれる、あつ、老婆の顔は白い粉を吹いたように真っ白で、眼も鼻も口もない……。

すべてはその道に原因していたんだと、その頃のことを佐伯は最近私に語った。おかげで毎夜身体はへとへとになり、やっとアパートの自分の部屋に戻って何ひとつ手につかず、そうかといっ

て妙な不安に神経が昂ぶっているものでろくろく睡ることもできなかつたという。彼はその頃せめてもに無為な生活から脱けだそうとして、いつかは上演されるだろうことを夢みながら、ひそかに戯曲を書こうと思ひ立っていたのだが、しかしそんな道をそんな風に帰つて来た状態でどうして戯曲の仕事が出来たろうか。出来なかつたのである。中庭を黒く渡る風の音を聴きながら、深夜の荒涼たる部屋のなかで凝然として力のない眼を睜みひらいていたという。突然襲つて来る焦躁にたまりかねて、あつと叫び声をあげ祈るように両手も差し上げるのだが、しかし天井からは埃ひとつ落ちて来ない。祈つても駄目だ、この病的な生活を洗い浄めて練齒磨の匂いのように新鮮なすがすがしい健康な生活をしなければならぬ

と、さまざまに思い描き乾いた雑巾を絞るような努力もしてみるのが、その夜の道がそうした努力をすべて空しいものにしてしまふのである。なにもかもその道が無理矢理にひきずって行く。それは佐伯自身の病鬱陰惨の凸凹の表情を呈して、頹廢へ自暴自棄へ恐怖へ死へと通じているのだと、もうその頃は佐伯はその気もなく諦めていたらしい。つまりはその道だったんだ、しかも暗闇だけがその道をいやなものにしていたのではないと佐伯はつけ加えた。日が暮れてアパートの居住者がそれぞれの勤先から帰つて来る頃、佐伯は床を這いだして街へ出て行くのだが、町へ出るにはどうしてもその道を通らねばならないと思うと、業苦を背負つたように憂鬱になつてしまふ。原っぱはいつもそこにあり、池

はいつもそこにあり、径はいつも泥濘ぬかるみ、校舎も柵も位置を動かない。道の長さが変わる筈もない。その荒涼たる単調さが街へ出ようとする自分のうらぶれた気分を苛立たせ、たちまち自分は灰色になってしまふのだというのである。

ところが夏も過ぎ秋が深くなって、金木犀の花がポツリポツリ中庭の苔の上に落ちる頃のある夕方、佐伯が町へ出ようとしてアパートの裏口に落ちていた夕刊をふと手にとつて見ると、友田恭助が戦死したという記事が出ていた。佐伯はまるで棒をのみこんでしまった。この人にこそ自分の戯曲を上演して貰いたいと思っていたその友田が死んだのだ。高等学校にいた頃、脚本朗読会をやつてわざわざ友田恭助を東京から呼び、佐伯は女役になつてし

きりにへんな声を出し、友田は特徴のある鼻声をだし、終つて一
緒に記念写真を写したこともある。コトコトと動いていなければ
気の済まない友田は写真をうつす時もひとりでせつせと椅子運び
をやっていた、それをものぐさの佐伯は感心して眺めていた。そ
んなことも思いだされて佐伯はああえらいことになってしもたと
ホロホロ泣いた。あの、時代に取残された頹廢的な性格を役どこ
ろにしていた友田が、気の弱い蒼白い新劇役者とされていた友田
が「よしやろう」と氣がるに蘊藻浜敵前渡河の決死隊に加わつて、
敵弾の雨に濡れた顔もせず、悠悠とクリークの中を漕ぎ兵を渡し
て戦死したのかと、佐伯はせつなく、自分の懶惰らんだがもはや許せぬ
という想いがびしゃつと来た。ひっそりとした暮色がいつもの道

に漂うていた。「つまりは友田の言った、よしやろう、これだな」
眩きながら固い歩き方でその道行きかけて、しかし佐伯はふと立ち停った。そうだ、あの道をいつペン通つてやろう、この考えがだしぬけに泛うかんだのだ。アパートの表を真つ直ぐに通じているかなり広い道があり、居住者が時どきその道を通つて帰つて来るのを佐伯は見たことがある。駅とは正反対の方角ゆえ、その道から駅へ出られるとも思えず、なぜその道を帰つて来るのだろうかと不審だったが、そしてまた例のものぐさで訊ねる気にもなれなかつたが、もしかしたらバスか何かの停留所があつてそこから町へ行けるのではないかと、かねがね考えていたのである。その想像が当るかどうか試してみようと佐伯はいつも思うのだが、見知らぬ道

をとぼとぼ行つて空しく引きかえして来る心細さを想うと、身体の疲労も思いやられて、ついぞこれまで実行する気になれなかつた。ひとつには弾みがつかないのだ。それ故いまふとそんな氣になつたことに佐伯はびつくりし、またその方角へひとりでに歩きだした自分を見ると、おやいつものおれとは違ふぞという奇妙な驚きに、わくわくしてしまつた。

つまりはよしやろうだなと呟き呟き行くと、その道には銭湯があり八百屋があり理髪店があつた。理髪店から「友田……」という話声が聴えて来た。パン屋の陳列ガラスの中には五つ六つのパンがさびしく転っていた。「電気マツサージ」と書いた看板の上に赤い軒燈があつた。ひらいた窓格子から貧しい内部が覗けるよ

うな薄汚い家が並び、小屋根には小さな植木鉢の台がつくつてあったりして、なにか安心のできる風情が感じられた。魚の焼く匂いが薄暗い台所から漂うて来たり、突然水道の音が聴えたりした。佐伯は思い掛けない郷愁をそそられ、毎日この道を通ろうと心に決めた。三丁行くと道は突き当った。左手は原っぱで人夫が二三人集つて塵埃の山を焼いていた。咳をしながら右へ折れて三間ばかり行くといきなりアスファルトの道が横に展けていてバスの停留所があつた。佐伯の勘は当つていた。そこから街へ通うバスが出るのだつた。停留所のうしろは柔術指南所だつた。柔道着を着た二人の男がしきりに投げ合いをしていた。黒い帯の小柄な男が白い帯のひよろ長い男を何度も投げ飛ばした。そのたびドスンド

スンと音がした。あんな身体になれば良いと佐伯は羨ましく眺め、心に灯をともしながらバスが迂回するのを待った。

帰りもバスだった。柔術指南所はもう寝しずまっていた。原っぱには誰もいなかった。一本道の前方にかすかにアパートの灯が見えた。遠い眺めだった。佐伯は街で買って来た赤い色の水歯磨の瓶を鼻にくつつけながら歩いた。その匂いが忘れていた朝を想い出させた。あたりの暗闇が瓶の色に吸いこまれ、佐伯の心は新しい道を発見したというよろこびに明るかった。だが、佐伯はいきなりぎよつとして立ちすくんだ。どこからかヒーヒーと泣き苦しむ声がかすかに聴えて来たのだ。佐伯は暗がり眼をひからせた。道端に白い仔犬が倒れているのだった。赤い血が不気味など

す黒さにどろつと固まって点点と続いていた。自動車に轢ひかれたのだなと佐伯は胸を痛くした。犬の声はしのび泣くように蚊細かつたが、時どきウーウーと濁った声を絞り上げていた。だらんと伸びて、血まみれの腸がはみだしていた。ピクピク動きたびに、ぶらんとした首がそこらじゅう這い廻るようであった。これでもまだ生きて泣いているのかと、佐伯には仔犬の最後のものがきがいじらしかった。佐伯は永いこと感動して眺めていた。仔犬の生きている声はいつかな消えようとせず、必死になってピクピク動いていた。その不死身の強さが佐伯の胸をうった。肺病なんかで簡単に死んでたまるものか、もつとほかに死に方があるんだと奇妙に昂奮して、ふと眼を上げると、アパートの門燈のまわりに深い

夜のしずけさがじーんと音を立てて渦まいていた。

佐伯のいう切っ掛けとはこの時に掴んだものだろうか。

（「文藝」昭和一八年九月号）

青空文庫情報

底本：「世相・競馬」講談社文芸文庫、講談社

2004（平成16）年3月10日第1刷発行

底本の親本：「織田作之助全集」講談社

1970（昭和45）年2月～10月

初出：「文藝 九月号」

1943（昭和18）年9月

入力：桃沢まり

校正：門田裕志

2006年3月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

道

織田作之助

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>